國民文庫

第壹編

歐米名家詩集

上卷

大和田建樹輯譯

東京 博文館藏版

歐米名家詩集　上卷

東京博文館藏版

田中秋月

大槻如電樹輯譯

歐米名家詩集

上卷

東京　博文館藏版

大和田建樹輯譯

歐米名家詩集

上卷

東京 博文館藏版

自叙

西洋の菫を我邦に移して香を失ふためしも有れば。日本の菊を彼地に植ゑて色を變へざるたぐひも有り。詩文に於ても亦然り。我萬葉古今の佳調を彼に譯して。必ず其風韵を失ふとも限らねど。彼ミルトン。シェークスピーアを我に翻して。悉く其趣味を同ドうすとも期しがたし。是れ風土人情の異ふるに因れり。余が此度歐米名家の傑作を翻譯して世に公にするは。或は香を失ひし菫に類するふきかの譏を免かるべからずといへども。よかれあしかれ一園の中に先づ之を栽培して試みんとするのみ。廣きが上にも廣きを望むは文學の園。つまらぬ花とて輕々しく拔きすてざるは園丁の任。その花

果して東洋の春に遇ひ。吸はれて甘露とふり蜜とふらんを撰擇するは蝶蜂の責なり。園丁ふんぞあづからん。あづからざるには非ず。未だ試みずしてあづかりいふを欲せざればふり。蝶たり蜂たる諸君の品評を得てはじめて多數の嗜好を知らんと欲すればふり。何れか梅何れか櫻。ひとり園丁が鍬の鈍きこそ恥かしけれ。

明治二十七年一月

寒梅の影さす窓にて　　編者しるす

歐米名家詩集上巻目次

目次

告天子（シェリー）……一丁
春は今（ホウサット）……十六丁
たそがれ（ロングフェロー）……廿二丁
わが望（ポープ）……廿六丁
失たる乳兒（ヘリック）……三十丁
海（コーンウォール）……卅一丁
破艦（ホルムス）……卅五丁
我花園（モーア）……四十丁
母の夢（バーンズ）……四十三丁
村の鍛冶（ロングフェロー）……四十五丁

兵士の夢（キャムベル）……五十一丁
流れ（ローウェル）……五十八丁
子供と子鳥（テコソン）……六十三丁
反響の野（ブレーク）……六十六丁
ホーヘンリンデン（キャムベル）……七十丁
今はの床（フード）……七十四丁
家を離れて（コレリッヂ）……七十七丁
樂しき我屋（ベイン）……八十丁
城（アルドリッチ）……八十三丁
初雪（ローウェル）……八十八丁
アルプスの嵐（バイロン）……九十三丁
三人の漁夫（キングスレー）……九十六丁

菫（テーロー）……百丁
戀（コレリッヂ）……百三丁
牧場よ（ヘリック）……百十七丁
歸家（サウシー）……百廿丁
夜半（サックヴィル）……百廿三丁
海に珠あり（ハイネ）……百廿七丁
紅薔薇（ゲーテ）……百廿九丁
せうび（クーパー）……百卅三丁
勇士の妻（テコソン）……百卅七丁
花賣娘（ウーサーリー）……百四十丁
パッサイックの瀧（アーヴィング）……百四十三丁
眠れる兵士（スコット）……百四十九丁

我子のおとづれ（ドーベル）……百五十三丁
盲兒（シッパー）……百五十八丁
かくれが（カルヴァーリー）……百六十一丁
サー、ジョン、モーア氏の葬儀（ウルフ）……百六十五丁
同情（ジョンソン）……百七十一丁
野寺の庭（グレー）……百七十二丁

歐米名家詩集目次終

歐米名家詩集上巻

大和田建樹　輯譯

告天子

シェリー

パーシー、ビッシー、シェリー氏ハ千七百九十二年英國サセックス州に生る。十三歳にしてイトン大學に入り。十六歳にしてオックスフォード大學に入れり。青年の頃品行修まらずして社會の攻擊を受くる事甚しく。遂に逃れて伊太利に遊びしが。過つて水に陷り千八百廿二年その旅中に死せり。時に年僅に三十。氏の著作中「レフューテーション、オフ、デーズム」「ヒム、ツー、イ

ソテレクチュアル、ビューテー」「レヴォルト、オフ、イスラム」「バンクェット、オフ、プラトー」「ジュリアン、エンド、マッダロー」「コリセーズム」「センシー」「ピーターベル第三世」「プロメジアス、アンバウンド」「ゼ、デフェンス、オフ、ポエトリー」「アドヲース」「キーツ追悼の詩」「トライアムフ、オフ、ライフ」「ゲーテ氏作ファウスト反譯」など最も名高し。

其一

天つ空より雲井より
おのづからふる調べもて
滿ちしこゝろを歌ふふる
汝が身をいざや祝ハまし

たのしき魂よ待てしばし
汝は鳥にて鳥ならず

其二

見あぐる空にほの〳〵と
あがるまに〳〵　あがるは汝か火の雲か
うたふまに〳〵　猶ひゞく　出らべは落ちて地の上に
姿は消えて青ぞらに　跡かすむ

其三

沈む夕日を照りかへす
黄金の雲に汝が影は
跡をつけつゝ馳するなり
雲より雲にうつるふり
まだ新しきよろこびの
燃えつゝのぼる如くにて

其四

飛びゆくまゝに消えてゆく
影はみどりの天の原
のぼる朝日ともろともに
星のかくるゝ如くにて

唯いつまでも喜びの
聲のみ雲に殘りたり

其五

白む東のひかりもて
やゝ消されゆく月の影
ありかさだかに見えぬまで
夜はほの〴〵と明けにけり
空にゆくへを失ひし
汝が身の影も是に似て

「其六

明けはふれたる朝空の
さびしき雲に月おちて
晝のひかりは世に滿ちぬ
又夜を殘すいろもふし
地球は今ぞ汝が聲を
うけて響を高めたり

其七

人に知られぬ汝が身には
似たる物こそ無かりけれ
空をいろどる夕ぐれの
霓の雲さへ降らし得ぬ

愉快はてなき音樂の
雨の滴も汝が身より

其八

妙なる思に身を焦がす
詩人の如くうたふらん
心のまゝに聲たてゝ
歌人の如くうたふらん
世界は希望にさそはれて
畏怖の心をわするまで

其九

雲にそびやる高殿に
かすかに響く琴の音は
人しれぬ戀を洩らさんと
すさぶ少女がわざやらん
汝が歌聲も唯それよ
妙ふるしらべの琴に似て

其十

宿る谷間の草かげに
身を置く露の花かげに
天つ光をほの〳〵と
はなつ螢のごとくにて

黄金のいろを花に葉に
散らす螢のごとくにて

其十一

そよふく風にやぶられて
まだき紅とく薔薇の花
顔は青葉にかくせども
隱れぬ色香は飛ぶ蝶の
心を空に融かすまで
あゝ此花か汝が愛は

其十二

草葉にそゝぐ朝あめか
花にうるほふ夕つゆか
そのうれしさも新たさも
なほうつくしき其色も
およばぬものは大空に
ひゞき滿ちたる汝が調べ

其十三

我に教へよ汝告天子
いかに樂しき心もて
明暮そらに歌ふらん
愛を稱へし言葉にも

かくまで清きよろこびの
滿ちたる聲はまだ聞かず

其十四

凱歌の曲も讃美歌も
汝が音樂にくらべては
むふしき調べとふりぬらん
かひなき響きと消えぬらん
その響きには調べには
缺けし光のあればこそ

其十五

されば知らじふ末つひに
その源はいづかたぞ
野邊か深山か海原か
雲より上の大ぞらか
世の苦しみはいさ知らぬ
聲よいかふる愛ならん

其十六

苦痛の影はいつとても
汝が身をよきて過ぐるなり
その喜びの清ければ
盡きせぬ愛こそ常磐ふれ

辛ひ滿ちたる汝が歌の
變はる戀路のかふしみも

其十七

寂てか寂めてか汝こそは
生死の海もきはむらめ
人間界に知られたる
それより深くふほ遠く
玉のしらべの流れ來し
その源こそ汝が胸よ

其十八

過去と未來は見やれども
　現在ふきこそ悲しけれ
知るか我身のよろこびも
　苦痛に生れしものなるを
知るか樂しき我うたも
　悲哀を告ぐる聲ふるを

其十九

愛憎驕奢恐懼ふく
　また涙をも流さずに
生れきたりし人ふらば
　習ひ來りし世ふりせば

わが人界のいかにして
　汝が喜びにちかづかん

其二十

樂の拍子のそれよりも
　書の教へのそれよりも
熟練ふかき汝こそは
　天地にすぐれし詩人ふれ
人間界を見おろして
　あざけり笑ふ汝鳥よ

其二十一

が汝身に持てるよろこびの
その半だに分てかし
さらば今聞く歌ゆゑに
わが感謝する如くにて
世界の耳を我聲に
傾けしむる時あらん

春は今

メリー、ホーウィット

詩人ウィリアム、ホーウィットの妻なり。夫は千七百九十五年に生れし人なるが。其妻の補助によりて著作を成就せしもの

多かりしと云ふ。

其一

『春よ〳〵
春は何くにとゞまりて
冬は早くも過ぎたるに　かくばかり後れしぞ
雪さへ今は解けゆくに
春はふゞおくれしぞ』

其二

『見よや少女（をとめ）

少女よ我は今そこに
　　のどけき日影に誘はれて
蜂には蜜をはこびつゝ
　木には蒼を贈りつゝ
　　我ゆくにはやひまもふし

其三

見よやこゝに
　我は今こそ來りたれ
　　聞けや小蜂の鳴く聲を
あの晴れわたる青空に
見よや雲雀の飛ぶ影を

胡蝶の羽れも生ひ出でぬ

其四

見よや少女
　見よや柳の芽は出でゝ
　　かよわき枝をおほひたり
苔みどりふる堤には
　星を散らして花ぞ咲く
　　菫も白くむらさきに

其五

聞けや少女

あの小羊の鳴く聲を
見よや烏の友よびて
森の梢にゆくかげを
生れそめたる白蝶は
日の光にぞ舞ひ遊ぶ

其六

少女よ少女
汝が身を圍む春の野は
小川の水はかゞやきて
緑あらたに萌え出でぬ
岡邊の梨は花白し

木の芽は風にそよぎつゝ

其七

天に地に
神こそ春をさづけたれ
鳥には歌を教へつゝ
盡きせぬ恵みを感謝せよ
この幸の内に住む
わが少女子よいざさらば

たそがれ

ロングフェロー

ヘンリー、ワッヅウォース、ロングフェロー氏ハ千八百七年米國メーン州ポートランド町に生る。十四歳にしてボードイン大學に入り。有名の詩人ナサニエル、ホーソン氏と殊に親友たりき。十八歳の時卒業して幾もなく同大學の近代語學教授と爲る。よりて實地研究のため。千八百六十八年より翌年まで歐羅巴諸國を遊歷し。千八百八十二年に死せり。年七十五。著名の作には「ヴォイセス、オフ、ナイト」「イーヴァンジュリアン」「ゼ、ゴールデン、リジェンド」「ヒアワサの歌」「バーヅ、オフ、ゼ、パッセージ」「フラワードリュース」ダンテ氏作「ディヴァイン、コメディー反譯」「ゼ、マスク、オフ、パンドラ」「ケラモス」「アルチマ、ツール」「ヘルメス、トリスメヂタス」「ミケール、ラメジェロ」など有り。

其一

黄昏すごき雲のいろ
虚空に散りて日は暮れぬ
波路に白く馳せゆくは
鳥の翼か夜あらしか

其二

ほの見えそむる燈火の
光は海士が里ふらん
窓より夜を打ちのぞく
子どもの顔ぞあらはれし

其三

もとむる影は何ものぞ
見いだす空は何方ぞ
暗に眼をそゝぎつゝ
いよ〳〵窓に近づきぬ

其四

さまよひあるく人の影
かしこに見えて又こゝに
たちまち高くのぼりつゝ
たちまち低く屈みつゝ

其五

怒れる波風こゑすごく
破れし窓を打つ夜半に
母はいかふる話もて
わが子の耳を滿たすらん

其六

怒れる波風こゑすごく
母の心を打つ夜半に
海より青く變はりたる
其顔いろは何ゆゑぞ

たそがれ

わが望

ポープ

アレキサンダー、ポープ氏は千六百八十八年に生る。英國龍動の豪商の子なり。天資文才に富み十三歳にして既に「オード、オン、ソリチュード」の作あり。二十歳にして「エッセイ、オン、クリチシズム」の出版あり。其頃專ら力と「イリアッド」の反譯に用ひたり。「ゼ、レープ、オフ、ロック」「エッセイ、オン、マン」は青年の時の作にして其名世に高し。また批評家としては着眼鋭利ほとんど文壇に敵なく。中に最も其才をあらはしたるは「モーラル、エピッスル」なりき。千七百四十四年五月三十日喘息に罹りて

死す。年五十六。

其一

先祖の土地を領しつゝ
その天然を身の限り
樂しむ人こそ幸福よ
その望その幸福
世と共にたのしまん

其二

牛は乳もて滿たされぬ
田は五穀もて滿たされぬ

羊は衣もて滿たされぬ
木は夏の蔭をあたへ
また冬の火をさづく

其三

身はいつとても平らけく
心はいつも安らけく
今日も明日も來ん年も
すこやかに世を送らん
人こそは幸福よ

其四

適度に學び又やすむ
無邪氣な心の起き臥しは
我のみ得たる樂しみよ
夜は安く幸ひにて
眠りつゝ夢みつゝ

其五

あはれ此世を世人より
知られぬ處に送らばや
悔ゆる日ふくて送らばや
石たてゝ終の床を
しるさぬもわが望

失せたる乳兒

ヘリック

ロバート、ヘリック氏は千五百九十一年英國龍動に生れ。寺院の教育を受け二十歳の頃より僧と爲れり。千六百七十四年に死す。年八十三。氏の詩は優雅を以てすぐれたり。著作甚だ多からず。

咲くと見しかひもふく
しをれたる蒼の花
あふあはれきのふけふ
ひらかれし目は閉ぢぬ

※　※　※　※　※

手向の水をいざそゝげ
おほひし土をぬらさずに
しめさずに

海

コーンウォール

其一

蒼波渺茫千萬里
天も一つのわたの原

大地におのが國しめて
境も知らず果もなし
雲と戯(たは)れ空と遊び
揺籃(ゆりかご)ふる乳兒(ちご)の如くに

其二

此身を載する大波の
上こそ常の我床よ
見わたす限り綠にて
わが世の中は唯しづか
來れあらし海の上に
われは夢を猶もつゞけん

其三

月を漏らす荒波に
さゝやく嵐の聲ずふり
幾重の底に打ち沈づむ
世界のさまや語るらん
碎くる波、泡だつ潮
あなおもしろ舟こそ家よ

其四

ねぐらに急ぐ村鳥の
母を尋ぬるごとくにて

たゞ青海のふところに
　此身を寄するたのしさよ
我を生みし海は母よ
　母はつねに我とぞ遊ぶ

其五

朝空あらふ白なみは
　うまれし我にそゝぎたり
鯨のこゑもひゞき來ぬ
　海豚のかげも浮び來ぬ
海の乳兒を世にむかへて
　あゝ靜けき天地よ波よ

其六

富と力を帆にあげて
　五十の夏をたゞ舟に
もとむる事の無き身には
　世の變遷もいさ知らず
生を受けし我うなばら
　死の來る日もいざ〳〵こゝに

破艦

ホルムス

オリヴァー、ウェンデル、ホルムス氏は千八百九年の八月廿九日に米國マサチューセッツ州のケムブリッヂ町に生る。十六歳にしてハーヴァード大學に入り。二十歳の時卒業して專ら法學を修めしが。間もなく轉じて醫學に從事せり。二十七歳の時醫學博士の學位を得てダートマウス大學の生理學と解剖學との教授と爲る。三十八歳にてハーヴァード醫科大學の解剖學教授に轉じ七十三歳まで其職に在りき。氏の初めて文壇に技倆を試みしは。蓋し千八百三十六年すなはち二十七歳の頃に當り。ボストン府にて出版せられし著作に起りしならん。其後「ウラコア」「ゼ、オートクラット、オフ、ゼ、ブレークファストテーブル」「ゼ、プロフェッソー、アット、エ、ブレークファスト、テーブル」「ゼ、ポエット、アット、ゼ、ブレークファスト、テーブル」「エルシー、ヴェ

ンナー、エ、ローマンス、オフ、デンスチニー」「ゼ、グアーディアン、エンジェル」「ソングス、イン、メコー、キース」「ソングス、イン、メコー、シーゾンス」「ゼ、アイオン、ゲート、エンド、アザー、ポエムス」「ラルフ、ワルドー、エマーソン氏傳」などの諸作引きつゞき世に出でたり。

破艦

其一

今はふごり
　やぶれし旗を取り捨てよ
大砲といろき関の聲ひゞき
　空を照らしてひらめきし
今はむかしの旗の色

躍るこゝろも何かせん
勇むこゝろも何かせん
星はひかりを收めつゝ
また海原に影もふし

其二

波は荒れて
風しまきやく海の上
紅したゝる丈夫の血しほに
染めなされつゝ敵兵の
膝折り伏せし甲板は
はや勝軍の跡たえて

また敗軍のこゝろもせず
嵐の神にさらはれし
鷲の翼をいかにせん

其三

波の底に
舟のかばねよいざしづめ
千尋の深さに響きし砲聲
かねて墓をや知らせけん
破れし舟を埋めんと
いざちぎれたる帆を張りて
その帆柱に旗あげて

今はさゝげんいざさらば
嵐の神よ稲妻よ

我花園

モーア

トーマス、モーア氏は千七百七十九年の三月廿八日愛蘭國ダブリンのアウンギール街に生る。幼にして文才あり。十四歳の時既に數篇の詩を作れり。後ダブリン大學に入りて古文學を修め。傍ら佛語伊太利語等を學びしが。二十歳の時英國に遊び。其作「オーツ、ツー、アナクレオン」を天覽に供するの榮を得。これより全く一生を文學に委ねんとの志を決したり。

時に或は職を海軍主簿官に奉じ英米の間に往來せし事もありき。詩の傑作多き中にも殊に「アイリッシュ、メロディース」の篇は頗る評判高く。今猶愛蘭の國歌として國民に謠はれたり。のち佛蘭西に遊び伊太利に旅して詩の大家ロード、バイロンと訪へり。「ライムス、オン、ゼ、ロード」の名篇は其旅中の作なりしと云ふ。晩年大に健康を失ひ遂に千八百五十二年二月に死せり。年七十三。氏の詩は想像と感情とを以て滿たされたるが多し。

其一

千草いろある我はなぞの
ひとり愛でしは既に昨日

君と二人が見る今日はなほ更にこそ美しけれ
樂しき夏の朝ぼらけ　花のあたりを飛ぶ蜂の
ひまなき聲にさまされて
破れし夢のおもしろさ

其二

アデンの鹿の子は見よやあれに
初は恐れて逃げ去らん　覆盆子食みつゝ草はみつゝ
馴らさば遂にば君が前に

暑さを避けて寐にやきし
眠る眼蓋にさはり見よ　草の臥床はあれよ行きて
ふほ其足を撫でゝ見よ

母の夢

ウヰリアム　バーンス

其一

我ひとり
あとにのこして消え失せし

その面影はいまもなほ
　　盡きぬ涙にうかぶなり
よべ見しゆめ悲しきかげ
　　あはれ我子ふ今はふし

其二

尋ねつゝ
　いつしかのぼる天つ空
手に〳〵提灯ともしつゝ
　　群れくる小児の愛らしさ
白き衣かゞやく顔
たゞ静にて聲もなし

其三

あなかふし
　ひとり我兒の火は消えて
暗路に迷ふいぶかしさ
　　其時我兒は振りむきて
『泣くな母よ此火影は
　　汝が涙もて消されたり』

村の鍛冶

ロングフェロー

傳既に出づ。

其一

茂れる栗の下蔭に
見えかくれする鍛冶の家
鐵より強き腕もて
働く人こそあるじなれ
その眞黒なる腕こそ
動きて止まぬ器械なれ

其二

見よやちゞれし其髪を
顆に流す正直の
汗こそあるじの寶なれ
力の限りはたらきて
世に諂はず媚びもせず

其三

鞴の響はあけくれに
絶えず聞えてひまもなし
夕べの鐘ともろともに
寸法たがはぬ槌の音
しづかに今日も響くなり

韋革に似たる其顔を

重く今宵もひゞくふり

其四

學校すみてかへる子は
鍛冶場を家とぞ馴れ睦ぶ
吼ゆるふいごぞ我友よ
燃ゆる鈸ぞ我友よ
飛び散る火花手に取りて
たゞ我物とぞもてあそぶ

其五

日曜ごとに寺にゆき
我子の中に座をしめて
祈禱聞くこそうれしけれ
説教聞くこそたのしけれ
娘が唱歌の聲きゝて
滿たす心やいかふらん

其六

娘が母の極樂に
うたふ調べか其こゑは
あはれそれかと聞く人の
眠ぼ墓のうちふるを
おほふ諸手につたはりて

玉ふす涙をいかにせん

其七

悲喜哀樂と勞働の
間に世をば送るなり
明くれば業をはじめつゝ
暮るれば業ををさめつゝ
けふもたゆまぬ仕事にて
安き夢をや贏くらん

其八

謝す、君こそは我ために

尊きをしへを授けたれ
火花うち散る生活の
鍛冶場に我もつとめなん
槌に打たれて鍛はるゝ
思慮功名の火よ鐵よ

兵士の夢

キャム・ベル

トーマス、キャムベル氏は千七百七十七年英國のグラスゴーに生れ、長じてグラスゴー大學の教育を受く。其二十一歳の時に作れる「希望の快樂」の詩は非常の名聲を博したり。戰

地の實景を畫がける「ホーヘンリンデン」の詩は普く人口に膾炙し苟くも英語を解するものにしてこれを知らざるを恥とするに至れり。其他「セオドリック」「ゼ、ピルグリム、オフ、グランソー」など殊に名高く。此「兵士の夢」も其一つなり。後グラスゴー大學總長に任せられ多年よく其職を盡して千八百四十四年に死せり。年六十七。無上の名譽を以てウェストミンスター、アッベーの地に葬られしと云ふ。

其一

聞けや休戰を告げわたる
喇叭の聲はひゞきたり
夕べの雲は地に垂れて
夜を守る星の薄あかり
剣に似たる影さむし
たゝかひ疲れし兵は眠り
重傷負ひたる勇士は死しぬ
山拔く力いまはいづこ
數千の兵は地の上に

其二

屍を襲ふ狼を
防ぐ火影のあたりこそ
わが身やすめんよき臥床
草葉の露をまくらにて

ふけゆく夜半は我ためにいざ〳〵肱を横たへん
たのしき夢をおくりつゝ
沈む心をなぐさめたり
夜の明けぬまに三度まで

其三

此おそろしき戰場を
千里の外にへだてつゝ
さびしき村の細道に
歩みを運ぶたのしさよ
秋の日影にさそはれて

進む歩みはふつかしき
わが故郷にむかひたり
喜び迎ふる妻と子ども
此身はいつかはや家に

其四

幼きむかし志ばし〳〵も
へだてぬ友と手を取りて
遊びなれたる野邊も見し
耳に親しくまだのこる
山羊の聲をもわが聞きし
稲刈る賤がおもしろく

しらぶる歌の一ふしは
つねに忘れぬ我故郷の
むかしの聲かあな戀し

其五

手に祝盃を取りあげて
我はこゝろに誓ひたり
涙の内に眞ごゝろを
見せてかくまで迎へたる
親しき友を見すてゞと
我を圍みて幾たびか
接吻しつる我子等よ

額をおのが膝につけて
すゝり泣きせし我妻よ

其六

『とまれよ長く故郷に
汝ハ疲れぬ手を負ひぬ』
呼びとめられて如何にせん
引かれもやくか後髪
たゞむ心の妻と子に
あゝ夜ハ明けぬ兵は
ふみだと共に殘されぬ
うれしき夢の影ハ失せて

草の蓐に風さむし

流れ

ローウェル

氏律博士と法學博士との稱號あるジェームス、ラッセル、ローウェル氏は千八百十九年の二月二十二日米國マサチューセッツ州ケムブリッヂ市に生る。十八歲にしてハーヴァード大學を卒業し。二十歲にしてボストンの高等法庭に入る事を許さる。然れども氏の志は文學に在りて其職に就くを好まず。二十一歲の時「一年の生命」と題する詩集を出版せしを始として其著作續々と世にあらはれ。名聲一時に驚ぎたり。三十八歲の時ロングフェロー氏の後を襲ひてハーヴァード大學の近代語學教授と爲る。此間種々の文學雜誌を發行せしもの多し。五十八歲にして西班牙旅遣公使と爲り。六十一歲にして英國旅遣公使と爲りたるが六十六歲すなはち千八百八十五年國に歸れり。氏が有名の作は「爐邊旅行」「柳の下」「我學の窓」「大伽藍」「我書の内」「キーツ氏の傳」「薔薇」などを以て最とす。

其一

日影に光ちらしつゝ
朝に夜半に
躍りつゝ輝きつゝ

其二

雪より白き月影に
散るハ花か　吹く風に立つは波か

其三

きらめく星の影のせて
さいはひふる　其あゆみ進めつゝ

其四

常にうれしき足踏し
あめに空に　のぼりつゝ疲れふしに

其五

いかふる日にも樂しげに
うへにしたに　すゝみつゝ息りなく

其六

またゝくひまもとゞまらで
同じさまに

ふかれゆく時と共に

其七

望みを常に滿たしつゝ
滿ちぬこゝろ
日と共に夜と共に

其八の上

泉よ我も汝ごとく
いつも上に
向はせよとこしなへに

其八の下

泉よ我も汝ごとく
日にあらたに
有らしめよ變化しつゝ

子供と子鳥

テニソン

哲學詩人の稱を得たるアルフレッド、テニソン氏は千八百九年英國リンコルンシャイア州のソマースビー村に生る。十九歳にして、ケムブリッヂ大學に入り、其頃既に「戀人物語」の作あり。二十歳にして「ティムバクツー」の詩を作りて金牌を得たり

三十六歳にして、サー、ロバート、ピール氏の推薦に依り。女皇陛下より年金二百磅を賜はるの榮を受け。四十一歳の時ウォーズウヲースの後を襲ひて欽定詩宗と爲る。四十六歳にして氏律博士の稱號を得。七十九歳にして貴族に列しロードの爵を賜はれり。其「内親王」「イーノック、アーデン」「イン、メモリアム」「進擊隊」「女皇メリー」「ハロールド」「ファルコン」「ゼ、カップ」などの諸作最も名あり。千八百九十二年死す。年八十三。詩名四海に響き推して歐州第一と稱せられしは近時氏一人あるのみ。

日影見そめし巣の内に
何をか私語く雛鳥は
母上われを飛ばしめよ

廣き野山に花園に
『いふ待てしばしわが雛よ
翼の強くなるまでは』
母の教へにしたがひて
しばらく翼を休めたり
その後つひに飛びゆきぬ

其二

日影見そめし床の内に
何をか私語く綠兒は
『雛』の如く起きさせよ
なほ行かしめよ野に山に

『いふ待てしはし我小兒(ちご)よ
　　手足の強くふるまでは』
母の教へにしたがひて
　　しばらく手足を休めふば
　　遂に飛ぶべき時は來ん

反響の野

ブレーク

ウヰリアム、ブレーク氏は千七百五十七年龍動に生れ千八百二十七年に死す。年七十。詩と畫との名人として世に知られたり。

其一

日は出でぬ
　　幸ひ空に影滿ちぬ
春を迎ふる鐘の音(ね)は
　　たのしき聲をおくるふり
うれしき調べ打ちそへて
　　鳥こそ歌へ喜びを
　　つたふる鐘ともろともに
我等が遊びは今ぞ時
反響(こだま)こたふる野邊にいざ

其二

をちかたの
　樫の木陰に座をしめて
こふた見おこす老人は
　我らが遊びを笑ひつゝ
みなこゝろ〳〵に語るふり
　われも昔はあの如く
　こだま答ふる野に出でゝ
見られし時もありつるを
　よろこび胸に滿ちたるを

其三

たのしみも
　見すつるまでに疲れたり
日ははや山に傾きぬ
　今日の遊びもこれまでぞ
ねぐらに急ぐ鳥ふらで
　母の家にと急ぎゆく
　姉よいもとよ兄弟よ
反響（こだま）こたへし野邊ははや
　ひとり淋しく殘されぬ

ホーヘンリンデン

キャムベル

傳すでに出づ。

其一

リンデンの野に日は落ちて
しづかに暮るゝ雪の色
アイサー川の水ひとり
闇を破りてひゞくなり

其二

寂寞としてふくる夜に
たちまち ひゞく 攻鼓

死期を指揮する篝火の
光は雪を焦がしたり

其三

喇叭に夢は破られて
いさみあつまる千萬騎
松明の影にきらめくは
双か馬か人影か

其四

山岳ふるひ雷ひゞく
千軍萬馬のその叫び

火花うちだす大砲は
雲間をはしる電か

其五

からくれなゐの雪の野を
つたふ光はほほ赤く
岩切り落つるアイサーの
水さへ染めて走るふり

其六

東西互に入りみだれ
あぐる矢さけび鬨の聲

硝煙彈雨の雲間より
日影はもれて今ぞ朝

其七

誰れ功名の空に飛び
誰れ敗北の墓に伏す
いざミューニヒよ汝が旗を
騎兵と共に進ませよ

其八

誰か別れん戰場に
一たびのぞむ兵は

雪を屍の褥にて
眠れや野邊の其墓に

今はの床

フード

トーマス、フード氏ハ千七百九十八年龍動に生る。幼にして
彫刻師の徒弟と爲り。學校の教育は曾て受けたる事なし。然
れども天賦の文才は奪ふ可からず。細工小刀とるひまにも
常に好んで詩歌を誦せり。遂に「龍動雜誌」の記者と爲る。氏の
詩は巧に人情の微妙と人事の複雜とを描寫すると以て一
時に名あり。中にも「襯衣の歌」「不運なる人」など其作の最た

るものなり。千八百四十五年に死す。年四十七。死後遺産なく
赤貧洗ふが如くなりしと云ふ。

其一

夜と共に靜まりゆく
其呼吸は低くかすか
命の波の身によせて
さまよふ程もいつまでぞ

其二

かたるにも聲をとゞめ
あゆむにも音をとゞむ

消えゆく命のばさんと
力のかぎり唯それに

其三

寐る時は死すとおもひ
死せしをば寐るとぞ見る
互にゆきかふ胸のうち
恐れよ望みよ死よ生よ

其四

夜は明けぬ雨は落ちぬ
寒き空かなしき床

とざす眼は又いつか
我世の朝を共に見ん

家を離れて

コレリッヂ

サミュエル、テーロー、コレリッヂ氏は千七百七十二年英國のデヴォンシャイヤに生れ。龍動の育兒院にて生長せり。十九歳にしてケムブリッヂのジェサス黌に移り。專ら詩と哲學と神學とを修む。然れども遂に學資の缺乏に妨げられて業を卒るを得ず。僅二年にして黌を辭したり。二十二歳の時「ロベスピールの落魄」と題せる院本一篇を草し。二十五歳の時「エンセント、

マリナー」および「クリスタベル」と作りて名聲共に高し。氏は天資神經質なりしが阿片を用ひて之を治したるより遂に多量の喫阿片家と爲り。かの「喫阿片家懺悔物語」の作者なるドクヴンシーをして爲に降旗と樹てしむる程なりしと云ふ。著作の世に知られたるは「レモース」「バイオグラフィア、リテラリヤ」「ザポリヤ」「エーヴ、ツー、リフレクション」「テーブル、トーク」「レメーンス」などなり。千八百三十四年死す。年六十二。

其一

我もし翼を身に持たば
飛びかよはまし朝夕に
戀しき人のそのもとに
あゝいかにせん鳥ならで
かゝる望みはかひもなし
我身はこゝにただ一人

其二

夢の翼にのせられて
しば〳〵あそぶ君の傍
眠れば世界は我ものよ
されど我夢さめはてゝ
見れば思へばかひもなし
羽ねなき我はただ一人

其三

たとひ王命ふり「とても
いかで眠りを禁むべき
曉はやくいざ覺めん
よしや夢路は絶えぬとも
明けぬ夜の間は目を閉ぢて
再び夢を續けふん」

「樂しき我屋

ペイン

ション、ホワード、ペイン氏ハ千七百九十二年の六月九日米國の新約克に生る。生長の後院本の作と彫刻とを以て業とせり。二十一歳より四十歳まで英國に遊びて龍動に住み。四十九歳にして阿弗利加テュニス駐劄米國領事に任せられ。千八百五十二年任地に死せり。年六十。殊に其名作として知られたるはスウヰートホーム(樂しき我屋)なり。此外院本詩篇の作また少なからず。

其一

黄金の臺玉の床
よし其内に住むとても
賤が伏屋に異ならず

天の授けし樂しみは
ひとり我屋に降り來て　清き光をはなつなり
我屋々々たのしき我屋
我屋にまさる家ぞなき

其二

富も奢も何かせん
たのしき家を離れては　心の平和を離れては
ふたゝび返せ我ために
なれし藁屋のふるさとを

我屋々々たのしき我屋　したしき鳥の其歌を
我屋にまさる家ぞなき

城

アルドリッチ

トーマス、ベーレー、アルドリッチ氏は千八百三十六年の十一月十一日米國ニウハムプシャイアのポーツマウスに生る「夕鏡」「家庭雜誌」「土曜新聞」等の記者なりき氏が詩の初めて世に出でしは十八歳の時にして引きつゞきあらはれしものゝ内おもなる作は「鐘」「野菊の頸飾」「眞愛の進路」「いたづ

ら兒物語」などなり。

其一

又來んために唯しばし
消ゆるは影か幻か
雲の帷をのぞきつゝ
壁にかすめる日の光
波間に色を照りかへす
帶一すぢの砂の道
手に手を取りて唯二人
景色の中に畫がゝれぬ
かの燈臺よこの城よ

城

其二

林檎の林春たけて
つぼみあまたの花の色
そよふく風にさそはれて
こぼれそめたる梢には
三つ四つ來なく駒鳥の
聲おもしろく聞ゆふり
風は花輪をいくたびか
たばねて鳥におくるらん
美をもて滿たす其胸に

其三

あはれ額の波間より
頭の雪の雲間より
若きむかしの樂しみを
ふがめわたさばいかならん
その新婚の年月を
共にかぞへば如何ふらん
目を射る限り樂しみの
光ふらざるものもふし
あゝ此景色よ此かげよ

其四

よし〳〵我は嘆くまゝ
昔に指をかゞむまゝ
されど心に針をさす
夢の影こそかふしけれ
あまる涙は誰がためぞ
ぬらす袂は何ゆゑぞ
清き臥床に枕して
さむく眠れる人ゆゑに
つめたくなりし人故に

初雪

傳既に出づ。

ローウェル

其一

降り初めし夕べの雪は
をやみふく夜すがら降りて
しづかなる色にぞ明けし
道もなく野邊もかくれぬ

其二

白妙の裘衣(かはごろも)きて
裝ひ立つ岡の松が枝

たぐひなき珠の光に
かざられし野邊の榆(にれ)の木

其三

花崗(みかげ)石もて葺ける軒端に
白鷺の毛ごろも借りて
飛びあそぶ烏うつくし
羽ばたきし落すハ雪か

其四

窓あけて見るもおもしろ
聲もなき空のけしきを

雪鳥の飛びゆく影は
黄金色の木の葉さぞ舞ふ

其五

思ひ出づるアウバン山の
石碑は埋れや果てし
雛鳥の母にかこまれ
其むねに眠るが如く

其六

『誰がこの雪をば降らす
父上よ語り聞かせて』

『それこそは此世をまもる
わが神の妙なるちから』

其七

降る雪をながむるまゝに
我こゝろ萎れぞ行きし
あふかなし暗がる空よ
かの山はつひに埋れぬ

其八

雲の如おほへる雪と
もろともに積るは思ひ

色に出でぬ袖のなみだも
　末つひに山となるまで

其九

『かなしみもかくるゝまでに
　天地を降りしづめたる
雪こそは神のしわざよ』
　父は子に語るも涙

其十

堪へがたき父の涙を
　顔にあびし我子は知るや

かの山の雪の下なる
　姉の身にかゝる慈愛の
　　露ふらんとは

アルプスの嵐

バイロン

ジョージ、ノエル、ゴーデン、ロード、バイロン氏は千七百八十八年の一月英國龍動に生る。始は家庭教育のみにて生長し。後學校にも入りたれど。間もなく廢して多くは獨修を以て學問せり。十九歳の時「怠惰の時」と題せる詩集を公にす。是れ其作の世に出でたる始なり。二十一歳の時英國を去りて二年

間歐洲大陸を漫遊し。二十四歳の時有名の「チャイルド、ハロールド」に着手せり。二十七歳にして妻を迎へたれど翌年故ありて離別し。再び英國に歸らざる決心を以て鄉と辭し。瑞西に住居して猶かの「チャイルド、ハロールド」の稿を繼ぎ。後また伊太利に遊び希臘に遊びしが。千八百十六年熱病に罹り遂に旅中に死す。年わづかに三十六。氏の詩は豪壯高妙を以て優れたり。

空の景色はかはりたり
かくまでに變りたり
嵐のこゑと闇の色
夜の空をおほひたり
おそろしきあひだにも

やさしく見ゆる美人の
眼の光る如くにて
峰より峰につたひゆく
いかづちの其ひゞき
雲の外にもとゞろきて
かへす反響は谷々に
アルプスの山さけび
ジラの峰こたへたり
同じこゝろのよろこびを
霧の中より聲たてゝ

三人の漁夫

キングスレー

チャーレス、キングスレー氏は千八百十九年英國デヴォンシャイアに生る。長じてケムブリッヂ大學に學び。後近世史教授となりて同學に勤めたり。其文學上最初の著作として世にあちはれしは「ゼ、センツ、トラジデー」と名づけたる戯曲にして二十九歳の時に在り。之を始として引きつゞき出でたる中に最も美妙の作と稱せられしは「ウエストワード、ホー」といふ小説なりき。千八百七十五年に死す。年五十九。

其一

夕日は波に影おちぬ

三人の漁夫は櫓を取りて
海を西へと乘り出だす
名殘をしげに岸に立つ
子どもよ妻よあなあはれ
一日一夜も休まれぬ
男子の身こそ哀しけれ
跡に殘りて常に泣く
妻子の身こそ哀しけれ
少ふき日々の贏もて
多き家内をいかにせん
波止場は名殘をしむとも
今日も今宵も又海に

其二

日ハはや波に影失せぬ
いざ燈臺に燭さんと
三人の妻はのぼりたり
雨を交へて吹き來る
颶風は海にはや窓に
飛び散る雲ハ一天に
墨をふがして物すごし
されど一夜も休まれぬ
男子の身こそ哀しけれ
跡にのこりて物思ふ

妻子の身こそ哀しけれ
波止場ハ名殘をしむとも
波風いかに荒くとも

其三

日ハ又空に昇りたり
見よ朝潮は砂濱に
三つの骸を打ちあげつ
妻のこゝろは如何ならん
夫は又とかへりこず
一日一夜も休まれぬ
男子の身こそ哀しけれ

跡に殘りて常に泣く
妻子の身こそ哀しけれ
眠れば事ハそれまでぞ
世の難難もこれまでぞ
波止場は名殘をしむとも
名殘よ波止場よいざさらば

菫

テーロー

ジェーン、テーロー氏は千七百八十三年に生れ。千八百二十四年に死したる英國の詩人なり。

其一

草葉の下に咲くすみれ
その謙遜の莖垂れて
花の頭をかゞめつゝ
隱すよ身をば人かげに

其二

あら美しの其花や
あら愛らしの其花や
薔薇の園に移すとも
恥かしからぬ花ふるを

其三

されど稟けたる天性に
　まかせて望む事もなし
しづけき草の下かげに
　えならぬにほひを放ちつゝ

其四

いざ川端に立ちいでゝ
　この愛らしの花を見ん
人のこゝろの色香をも
　やさしき花に習はんと

「戀

傳既に出づ。

コレリッヂ

其一

喜怒愛樂は人の身を
　心のまゝに動かせど
　戀の使のほかふらず
戀の欲はおのが手に
　養はれてぞ燃え出づる

其二

醒めて夢みる夢の内に
しば〳〵我は遊びつゝ
樂しき時をすごすふり
深山の奥の古寺に
わが運ばれて立ちし時

其三

いま月かげは地に落ちぬ
夕べを殘すくれふぬの
空のひかりに交ぜられて

戀の、望みの、喜びの
少女(をとめ)はそこに立ち居たり

其四

少女はあれふる騎馬武者の
像にもたれて立ち居たり
月のあかりを身に受けて
夕べのかげか其人か
たゞ我歌を聞き居たり

其五

其身は少しの哀しみも

知らぬ少女よ我戀よ
あはれ望みよ喜びよ
哀しますべき我歌を
心ひとつに聞きぬたり

其六

荒れて幾代の古寺に
かなひて凄き古歌の曲
琴のしらべも我ふがら
うたふにつれて澄み渡る
低く哀しく身にしみて

其七

紅そゝぐ頰のいろ
下にかたむく目の光り
おさへかねつゝ打ち守る
我まごゝろや知りぬらん

やさしき少女は猶そこに

其八

昔がたりを初めつゝ
我は少女に聞かせたり
十年の長き年月を、

かの騎馬武者の一段を

戀におくりし一曲を

其九

他人の戀を身によせて
我は語れりその武者の
身にあつめたる哀しみを

沈みし古歌の一ふしに
おのが心を言はせつゝ

其十

紅そゝぐ頬のいろ
下にかたむく目の光

やさしき少女は猶そこに
たゞ愛をもて打ちまもる
我眞ごゝろや許すらん

其十一

されど勇氣の武士が
みだるゝ戀に狂ひつゝ
また夜晝の差別なく
山路に馳せし物がたり
我は少女につゞけたり

其十二

あるはさびしき谷に入り
あるは小暗き山陰の
木の下みちに迷ひつゝ
又ある時は日影よく
晴れたる峰にのぼりつゝ

其十三

天つ使はあはれふる
武者の前にぞ現はれし
光りかゞやく翼もて
そのとき惡魔の立ちぬたる
影をも武者は見とめたり

其十四

何をふしゝかいさ知らず
知らずに武者は飛び入りぬ
惡徒の中に突き入りぬ
死にもまされる恥辱より
かの戀人を救ひたり

其十五

その戀人の泣く涙
武者の胸をやぬらしけん
されど狂氣は救ひ得ず

あはれ戀路に亂されし
識りは遂にかへし得ず

其十六

其戀人に扶けられ
武者は空洞に身をおきぬ
狂氣は遂にとゞまりぬ
されど呼吸ふき散こそ
枯葉の床に眠りたれ

其十七

今はの言葉……あふあはれ

いまぞ哀しき我しらべ
ふるへる聲にともなひて
聽者の胸や亂すらん
止りがちふる琴の音よ

其十八

かたる言葉は聽く人の
胸に打ち込む釘ふらん
腹にさしこむ針ならん
話かふしくふるまゝに
空はいよ〳〵暮れ渡る

其十九

身を襲ひくるその望み
望みを燃やす其恐れ
見るに見られぬ其刺撃
深きこゝろの水底に
ひそみかくれし其願ひ

其二十

悲喜こもゞに亂しつる
少女の顔にくれふぬを
散らすや戀の耻かしさ
低く我名を呼ぶ聲は

その唇にひゞきたり

其二十一

少女の胸は溢れたり
我ふがむるを知りながら
足はこなたに動きたり
はづかしげある其眼は
たちまち我に近づきぬ

其二十二

少女は腕をさしのべて
我身を半ば圍みたり

我が少女が愛の手が
頭を少しうなたれて
顔見あげつゝ言葉ふし

其二十三

目に示さるゝ色よりも
心に觸れて傳はりて
まづ我胸に響きしは
恐れの聲か愛の音か
又はづかしさや交ふらん

其二十四

その恐れをば靜めたり
その恐れこそ靜まりたれ
少女は戀をぞ語りける
かくて我戀ゼネヴァの
こゝろは我に靡きたり

牧場よ

傳既に出づ。

ヘリック

其一

牧場よ

汝は綠にかゞやきし
　汝は花もて滿たされし
樂しき春の遊場を
　少女に貸しゝも汝ふりき

其二

汝は妙ふる少女子が
　麥藁細工の箱もちて
蓮花の花を摘みあつめ
　歸りしさまもなゞめたり

其三

丸くなりつゝ歌ひつゝ
　遊びし少女を汝は見し
花なす少女は少女ふす
　花を手ん手にもぎしつゝ

其四

今は何くぞ蹈みあそぶ
　その美しき足跡は
今は何くぞ春風に
　亂れし髮の面影は

其五

貧しくふりし人の身に
かへらぬ昔の如くにて
今あはれなる汝が地よ
殘るは嘆きの聲ひとり

歸家

サウシー

ロバート、サウシー氏は千七百七十四年の八月。英國ブリストル州のワイン街に生る。長じてオックスフォード大學に入り。コレリッヂ氏と友たり。氏の詩集は驚くべき數にて百冊以上に上りしと云ふ。其他に歴史家としても傳記作者としても有

名なり。千八百四十三年に死す。年六十九。

其一

露けき空にきらめくは
野邊の雲雀のあがる影
おもしろき其歌は
旅ゆく人をふぐさめて

其二

つかれし足を引きつゝも
猶たどりゆく眞晝中
こゝちよく吹く風は

旅ゆく人をふぐさめて

其三

曇らぬ日影に照らされて
歩みもよわる夏の空
ゆく水のひゞきこそ
旅ゆく人をふぐさめて

其四

山のあなたに日は入りて
ひゞく羊の鈴のこゑ
打ちしづむ夕べにも

旅ゆく人をふぐさめて

其五

旅路は今ぞなごりにて
馴れし鐘こそ聞ゆなれ
それよりもうれしきは
門に迎ふる愛のこゑ

夜半

トーマス、サックヴィル氏は千五百三十六年英國サッセックス州の

サックヴィル

バックハーストに生る。幼にして家庭教育を受け。又僅の間オックスフォード大學に入り。後ケムブリッヂ大學に於て技術博士の稱號を得たり。氏は法律家と政治家とを以て自ら任じたれども。大學に在りし日より自然に得たる詩作の熟練は遂に其名を成さしめたり。千六百八年に死す。年七十二。

其一

夜半は來れり宇宙に
生きとし生ける物は皆
夢に遊ばぬものもなし
巣に包まれて打ちねむる
鳥よ子鳥よ親鳥よ

心地よげなる雛の子の
新は母の胸ならん
水もねむれり海も靜か
平和の影は野に森に

其二

星は下界を見おろして
大空たかく笑ふふり
天地萬物すべてみな
花か黃金か其かげは
つかれ休むる時は今
兎の床に犬も來ず

鹿の枕に死も寄せず
雉の恐るゝ鷹の爪も
その夢までは襲ふまじ

其三

熊も眠れり砲音の
きこえぬ夜半の我閨に
犬の恐れをよそに見て
森にたふれし大鹿の
枕にさはる風もふく
また獵人のあとたえて
臥猪の床は夢しづか

つとめし畫の報いを今
受けてぞ休む天も地も

海に珠あり

ハイネ

ハインリヒ、ハイネ氏は千七百九十九年に生れ千八百五十六年五十九歳にて死したる獨乙の詩人なり。青年の頃法律學を修めしが後また宗教家と爲りて專ら其事に身を委ねたり。三十歳よりは多く佛國巴里に住みて其佛國文學上に及ぼしたる功德少なからざりしが爲め佛國政府より其報酬を受くるの榮を得たり。其作の有名なるものと「旅の畫」「獨

乙「冬の詩」「ローレライ」等です。

其一

海に珠あり天に星あり
されど我こゝろ
我こゝろよ我こゝろよ
我心には情(なさけ)あり

其二

海も大なり天も大ふり
されど星よりも
真珠よりも明らかなる
我心こそなほ大なれ

其三

少女(をとめ)が愛に打たるゝ時は
あはれ我こゝろ
我こゝろも海も天も
とけて情となりにけり

紅薔薇

ゲーテー

ヨハン、ウルフガング、ゲーテー氏は千七百四十九年普國の

フランクフルトに生る。十六歳にしてライプチッヒ大學に入り法律を修む。然れども其志は詩と小說に在りき。十九歳にして「ディー、ローン、デス、ヴェルリーブテン」「ディー、ミッチアルダイゼン」の二戲曲あらはれたると始として著作甚だ多し。千八百三十二年死す。年八十三。

其一

子供は薔薇を見つけたり
花ぞのゝ其うちに
薔薇は巧みに隱れたり
生ひ茂る其枝に
昇る朝日の光にて
きかりにほふ其花は
愛する子供の一心に
花のゆくへを尋ねたり
あはれ葉陰にかくれたる
小さき花よ紅薔薇よ

其二

『身をかくすとも紅薔薇よ
根とともに引きぬかん』
『抜かば抜けゝ子供等よ
手を指をいざさゝん
刺さば腫れなん痛みふん

戯むれにては終るまゞ
猶も譏らんかずゝに
汝が身の所爲の愚かさを』
あはれ葉陰にかくれたる
小さき花よ紅薔薇よ

其三

子供は花に手を觸れて
かくれがを見出したり
薔薇は子供につかまれて
又ふりかへり見あげたり
子供を刺して戯ひて

遂に痛みを贈りたり
あはれ痛みよいつまでも
癒えぬ其身の苦しみよ
あはれ葉陰にかくれたる
小さき花よ紅薔薇よ

せうび

クーウパー

ウヰリアム、クーパー氏は千七百三十一年英國のハートフォードシャイアに生れ。長じてウエストミンスター學校などにて教育を受けたり。三十一歳の時不幸にも發狂してセント、ア

ルバンスの養育院に入れられしが幾もなく快復して文學上の著作に從事し。四十歳の時にはジョン、コウトン氏と力を合せてオルチー、ヒムス」と題せる讃美歌の書を編纂せり。又其著作にて「過失の進歩」「トルース」「テーブル、トーク」「エキスポスチュレーション」「ホープ」「チャリチー」「コンヴァーセーション」「レタイアメント」など最も有名なり。又古詩「ホーマー」の翻譯をも公にせり。千八百年死す。年六十九。

其一

神のおくりし村雨に
ぬれてぞにほふ花薔薇
めぐみの露を身に受けて

重きかうべをもたげつ

其二

花には滿たす其ふみだ
葉ごとにつたふ其しづく
垣のあなたに唯ひとり
蓉のこゝして泣くやらん

其三

ぬれて花環にふらねども
無情の人は手をふれて
有情の花をつかみたり

せうび

花はたちまち地に落ちぬ

其四

愛づる心の一つより
出でゝつれなき其しわざ
ふかく沈める哀しみを
壓して破りて地に投げて

其五

あゝ此花よ手にふれて
振らるゝ事のふかりせば
その盛にも逢ふべきを

涙ほす世もあるべきを

勇士の妻

テニソン

傳既に出づ。

其一

我屋に擔ひ歸されし
勇士の死骸受け取る妻
泣かず亂れぬ心の雄々しさ
遂に命もつゞかじと

主人を氣づかふ侍婢の
さゝやく聲は響き出でぬ

其二

侍婢どもは聲々に
あつぱれ武士よ我勇士よ
味方に取りては好き味方
敵に取りては好き敵と
響め立つれども其妻は
言はず語らず動きもせず

其三

侍婢どもを退けて
歩みを移す死骸の前
静にのくる覆ひの白布
妻の心は如何なりし
されど泣聲なほ立てず
言はず語らず動きもせず

其四

老いたる乳母呼びいだし
子を我膝に抱き取りぬ
今ぞ湧きくる千筋の涙
たゞ夕立の如くにて

『あはれ我子よ死ぬべきに
死ふぬは御身のある故ぞ』

花賣娘

ウヰーサーリー

名はエフィー。未だ其傳を詳にせず。

其一

道ゆく人は絶えはてゝ
さよふけわたる雪の上
たどる少女が引きあるく

足には靴も足袋もなし
風は烈し身は疲れぬ
たふれ臥したる少女子が
あはれその頬は涙の露の玉
賣り殘したる花ははや
枯れはてゝ色もふし

其二

日影かゞやくクリスマスの
うれしき朝とふりにけり
天使はこゝにあらはれぬ

黄金の裳裾かへしつゝ
風はふきぬ雪は晴れぬ
涙みなぎる少女子の
顔を天使はながめたり
あはれその
賣り殘したる花ははや
枯れはてゝ色もふし

其三

しめる瞼の其うへに
天使の指は置かれたり
しをれし花の其枝に

やさしき指はさはりたり
鐘の音はよろこびを
つたへて寒き朝空に
今こそ高く響くふれ
あれ見よや
もとの色香に咲きかへる
花のつぼみよ少女子よ

パッサイックの瀧

アーヴィング

ワシントン、アーヴィング氏は千七百八十三年米國新約克に

生る。法律を學びて狀師と爲りたれど二十七歳の頃には兄弟と共に商業と企てたる事もありき。是より先十九歳の時に「ゼ、レッタース、オフ、ジョナサン、オールドスタイル」の著ありしを始として。「サルマグンディ」「新約克史」「ジェオッフレー、クレーオンス、スケッチ、ブック」などの名作を次々に出だせり。殊に最末の作は英國人の喝采を博したり。かくて四十歳前後より六十歳前後までの作には「ブレースブリッヂ、ホール」「旅人の話」「閨龍傳」「西班牙の勝利」「マーガレット、ミルラー、デヴィッドソン傳」「オリヴァー、ゴールドスミス傳」「マホメット傳」「華盛頓傳」などありき。嘗て英國に在りし日。米國文學の代表者として英大の歡待を受けたる事は無上の名譽として世に知られたり。五十九歳の時西班牙公使となりてマドリット府に在留

する事六年。歸國して後千八百五十九年の十一月に死す。年七十六。氏は詩文中に決して自家の憂苦を表はさゞりしと云ふ。

其一

綠木ぶかき谷かげに、
一筋かゝる瀧の水
森のおくには小男鹿の
眠れる夢もしづかにて

其二

露にひもとく野邊の花

風にそよつく榆の枝
岸をあらひて流れゆく
水は優しく美しく

其三

此ほのぐらき山かげの
景色をめでゝ誰か住む
雷よ嵐よ稲づまよ
山嶽うたひ谷こたふ

其四

しのぎをけづる戰ひの

聲は一度にひゞきたり
瀧の響か勝どきか
血しほ点たゝる生首か

其五

にほひえふらぬ花の色
光もきよき瀧の糸
かゝる景色を見わたして
猶つたふしと笑ふらん

其六

森を平らげ山を裂き

峨々たる谷の岩角に
清き流れを追ひやりて
雷なす浪を湧かせたり

其七

いく年月は回り來ぬ
暗き木陰はあきらかに
けはしき岩は平らかに
たがへされたる跡はなほ

其八

つんざかれたる岩のさま

雲に聳ゆる木々のいろ
なほ旅人のたましひを
奪ひてかゝるこの瀧よ

眠れる兵士

スコット

サー、ウォーター、スコット氏は千七百七十一年の八月、蘇國エディンバラに生る。始め法律を學び二十一歳の時狀師と爲れり。然れども後には萬事を抛ちて文學上の著作にのみ耽り、最初の出版として世の喝采を得しは「ゼ、レー、オフ、ゼ、ラスト、ミンストレル」なりき。六十歳の時中風症に罹り、其翌年轉地療

養として伊太利に遊びしが。歸國の後千八百三十二年の九月二十一日を以てアッボッツフォールドの家に死せり。年五十九。詩にては「マーミオン」「湖上美人」散文にては「ウェーヴァーレー」「アイヴァンホー」「ケニルウォルス」「拿破翁傳」を以て有名なる作とす。

其一

あはれ兵士よ
　汝が事すでに畢りたり
　　眠れよ覺むる日も知らで
また戰場を夢むふよ
　闘の聲にもおどろかで

敵も侵さぬ我國の
　臥床を神は設けたり
手向の樂の物の音は
　眠る枕やぬらすらん

あはれ兵士よ
　汝が事すでに畢りたり
　　眠れよ覺むる日も知らで
また戰場を夢むふよ
　出陣の日もよそに見て

其二

あはれ兵士よ

凄き響きは汝が耳を
もはや襲はん由もふし
鎧のそよぎ太刀の音
駒の嘶き喇叭の音
鼎呼の聲も號令も
とゞかぬ耳に聞ゆるは
たゞ五位鷺の打つ鼓
朝の雲雀の笛のこゑ
眠れ兵士よ
軍の庭のすさましき
響は又と聞ゆまじ
嘶く軍馬驅ける武者

今はむかしの風の音

我子のおとづれ

ドーベル

シドニー、ドーベル氏は千八百二十二年英國のペックハム、ライに生れ。詩人として生涯を送りつゝ千八百七十四年に死せり。年五十。

其一

いざ事問はん舟子等よ
『我子知らずや我子をば』

『其名はいかに覺束ふ
　如何ふる舟に乘られしぞ』
『名をば太郎と呼ばれしが
　海原さして漕ぎ出でぬ
いかなる舟か知らねども
　我子は人の子にあらず

其二

『海より歸りし舟子ども
　ふどて行方を知らざるぞ
波路はるかに乘り出でし
　太郎をふどて知らざるぞ

いま此里に住むものが
　太郎を知らぬ者やある
海に浮びし舟子等が
　太郎を知らぬ事やある

其三

『いかに我子はあるやらん
　我子の行方かたらずば
舟人ならず水手ふらじ
　その腰蓑は何のため
その櫓も械も何のため
　碇も帆綱も何のため

浄瑠璃丸こそ舟の名よ』
『静にし給へ聲高し』

其四

『静にせよと何ゆゑぞ
我子太郎の身の上を
問ふに何をか憚らん
よし我調子たかくとも
今まで里を呼ばゝりて
あるきし聲は誰も知る
今更しづかに何故ぞ』
『あの子の舟は沈みしよ

其五

『いかに我子のおとづれは
いかなる舟か知らねども
我乘らざりし舟なれば
浮くも沈むも儘ふれど
我子かへせや舟人よ
いかに太郎のおとづれは』
『まこと沈めりあの舟に
乘りたる人はすべて皆』

其六

『いかに我子のおとづれは
　我は他人の母ふらず
他人の舟の沈みたる
　話きゝても何にせん
我子はいかにのう我子
　我子のゆくへいざ語れ
我子のたよりいざ聞かせ
　戀し我子のおとづれを』

盲兒

シッバー

名はコルレー。未だ其傳を詳にせず。

其一

わが樂しみをよそにして
　かゞやく光を受くる身の
その幸ひをいざかたれ
　いかなるものぞ光とは

其二

日はかゞやくと人はいふ
　熱きものぞと我は知る
晝はいかふるものやらん

夜はいかなるものやらん

其三

ひとり心を暦にて
つくり出だせる夜と晝
遊べば晝の時を知り
眠れば夜半とおぼえたり

其四

わが望なき行末を
かふしむ聲は汝が口に
つねにひゞけど堪へ忍ぶ

此身は心ひとつにて
かなはぬ嘆きくりかへし
やすき心を亂すなよ
目は人並に見えずとも
うたふ間は我ぞ王

其五

カルヴァーレー

のくれが

かくれが

名はシー、エス。米だ其傳を知らず。

其一

枝うちたれて池水を
　のぞく塘の柳かげ
やすむ少女の愛らしき
　眼は星ときらめきて
戀か思む少女子が
　こゝろは水の遠ふらん
その故郷にわかれすむ
　兄と妹の上ならん
ほの〳〵かすむ夕波の
　あふた遙にふかめつゝ

其二

かゝる處に打ち響く
　聲は大人か子供らか
はやあらはれぬ其群集
　少女の身をばいかにせん
しばし逃ぐるか隱るゝか
　この一嵐すぐるまで
少女は急ぎ身をなげつ
　ザンブの聲は水にあり
跡まだ失せぬ波の輪を
　柳のかげにひろげゆく

かくれが

其三

人目忍ばんばかりにて
　せし振舞の粗忽さよ
されど憂ひゞ驚かゞ
　此身は今ぞふるさとに
思を馳せしはらからの
　樂しくすめるわが宿に
嵐一たび過ぎ去らば
　又塘にや遊ぶらん
おゝ愛らしの少女子よ
　水鼠こそ汝が名ふれ

サー、ジョン、モーア氏の葬儀　ウルフ

チャーレス、ウルフ氏は千七百九十一年愛蘭國のダブリンに生る。長じてウヰンチエスターおよびトリニチーの二大學に教育を受け。二十九歳の時擧げられてチロン州の牧師と爲る。職務繁劇の上に平生攝生に不注意なりしかば千八百二十三年遂に早世す、時に年三十二。其小品の著作多き中に。今日猶詩人として敬慕せらるゝは此に掲げたる一篇あるが爲めのみ。

其一（上）

太鼓の音もとゞろかず
樂の調べも流れ來ず
空しき骸を打ち載せて
城にいそぎし其ときに
墓に向ひし其ときに

其一(下)

別れを告ぐる兵卒が
たゞ一發の砲聲も
聞えぬ空のさびしさよ
わが英雄を送りぬく
墓のほとりは寂として

其二

嵐も眠る眞夜中に
銃の先もて芝土を
堀り起しつゝ葬りぬ
消えてはとぼる遠方の
ともし火青く月くらし

其三

骨を納むる棺もふく
顏うちおほふ布もふし
されど疲れて打ち眠る

勇士のさまを其まゝに
軍服むねに照らさせて

其四

言葉ずくなに祈禱しつ
嘆きの聲は立てねども
死顔とくと打ち守り
あすはいかにと思ひやる
わが腸はしぼるまで

其五

狹き臥床を設けつゝ

おもふも哀し此首は
敵の刃にかゝらずや
我等はやがて此土地を
波路はるかに別れなん

其六

魂去りし亡きからを
見つけて敵や罵らん
されど其身を同胞の
つくりし墓に横たへて
眠らば恨も遺るまじ

其七

半はうづみ畢りたり
　はや退軍の時ちかし
たちまち響く山彦は
　打ち出す敵の銃音か
　　あな忌ましやあふ無情

其八

涙を拂ふ手は遲く
　やうゝ埋み畢りたり
立つべき石も垣もふく
　されど名譽と諸共に

同情

未だ其傳を詳にせず。

エム、ジョンソン

肥えたる少女瘦せたる小鳥
　二人は野邊に遊び居たり
少女の曰く
『このあたゝかき春日にも
衣なければいかばかり
　寒さを身には覺ゆらん』

かれを此地に殘しつゝ

小鳥の曰く
『あゝ美しの少女子よ
さぞ寒からん一枚の
羽根さへ持たぬ君こそは』
鳥は少女を少女は鳥を
あはれと思ひ思はれて
空晴れわたる春の野に
身ぶるひしつゝ立ち居たり

野寺の庭

グレー

トーマス、グレー氏は千七百十六年英國龍動に生る。長じてイートン大學に入り。十八歳にしてケムブリッヂのピーターハウス大學に轉じたり。二十三歳より二十五歳まで佛國および伊太利に遊び。英國に歸りて再びケムブリッヂに入り。氏法學士と爲れり。二十六歳の時「オード、ツ」、「スプリング」の作成りしを初として續々其名作を世に出だせり。五十二歳の時ケムブリッヂ大學の近世史學教授に擧げられ。千七百七十一年に死す。年五十五。著作中有名なるは「野寺の庭」「詩の進歩の歌」「ゼ、バード」等を以て最とす。

其一

夕べを送る鐘の聲

ひゞく方より暮れそめて
牧場の牛は我小屋に
小田の農夫は我いへに
身を休めんとかへりゆく
地上に立ちて殘りしは
暗と我との唯ふたり

其二

四方のふかめはほのぐらく
たゞ沈みゆく夕まぐれ
ものさびしさの色ばかり
滿ちて空をもおほひたり

眠氣にひゞく鈴の音は
休みおくれし小羊か
虫の羽音もかすかにて

其三

篤に其身をうづめたる
塔の屋根には梟の
月にむかひて訴ふる
聲より外に物もなし
かくれが近くねらひよる
敵とや我をおもふらん
夜はたゞしづか唯靜か

其四

かなたの松の下かげに
こふたの杉の木のもとに
つもれる土ハ何ふるぞ
つらなる石は誰がものぞ
岩床ふかく枕して
長き夢をやむずぶらん
村の先祖は皆こゝに

其五

梅が香おくる朝風も

しばふく鶏の朝聲も
友よびかはす燕も
反響にかへす笛の音も
寒きねむりの枕をば
また呼び起すすべもなし
呼べど答ふる聲もふし

其六

なれたる閨の埋火も
よその寒さや防ぐらん
夕飯のけむり我ためにし
又立てわぶる妻もなし

家に歸れば待ごほに
　笑顔あつめて父の膝
　　圍みし子等も今いづこ

其七

麥はいくたび其人の
　鎌にかゝりて刈られけん
畑はいくたび其人の
　鋤にすかれて榮えけん
遂ひやる野邊の牛馬も
　伐りだす森の松杉も
　たゞ其人にまかせしな

其八

やゝ高ぶりの心もて
　わびしく世をば送りたる
其人々を笑ふなよ
　やゝ輕しめの眼もて
利益を村にのこしたる
　その勞働を見くだすな
　　天のさづけし運ふるぞ

其九

功名利達そのまゝに

願ひて得られぬ事もなく
美女三千にかしづかれ
鉅萬の富はきはむとも
一たび死期の來るときは
たゞ邯鄲の夢のあと
墓の外には何ものぞ

其十

紀念碑建てゝ功業を
頌する子孫なしとても
先祖の徳は消え失せず
先祖の光はかくるまじ

壯嚴美麗の廟屋に
とゞろく讃美の歌ごゑも
死者の耳には何かせん

其十一

反魂香の煙にも
呼びもどされぬ面影を
像に刻みて千載の
世に遺してもかひぞなき
謗讃の聲も稱賛の
その身にあまる言の葉も
死者の耳には何かせん

其十二

あゝこの苔の下ふかく
そも何ものか眠るらん
天つ光を身に受けて
世に照りかへす詩家の胸
政事を握る其腕は
人の心を春にふす
樂師の指ともろもとに

其十三

されど磨かぬ白玉は

光ふくして終りたり
光はあれど山かげに
埋れしまゝに過したり
一たび春の風ふかば
流れ出づべき山水も
あたら氷に閉ぢられて

其十四

千尋の海の水底に
人見ぬ波を照らすらん
眞珠の數はいくばくぞ
深山のおくの草かげに

知られぬ春を見せて咲く
花の色香やいかふらん
暗の錦のかひなさよ

其十五

村の失政いかりたる
小ハムデンも此墓に
筆を執りては書かざりし
小ミルトンも此墓に
血の流をば見せざりし
クロムウェルも此墓に
よこたはりつゝ諸共に

其十六

生殺與奪の權を得て
誇るも何かうらやまん
榮枯盛衰その身には
めぐり來らんよしもなし
たゞ國のため民のため
五穀成就を祈るこそ
其人々の望みなれ

其十七

血に易へ得たる王位には

即けと勸むる人もふく
慈悲の門をば世の中に
鎖せと告ぐる人もなし
限ある身の運命は
限ふき身の善根と
力あはせて世と共に

其十八

わが良心をあざむきて
受くるこゝろの苦しみを
かくさんために其恥を
おほはんために捧げたる

ミューズの神のそふへもの
詩歌の巧みも何かせん
清きこゝろの彼等には

其十九

塵の浮世の波風も
よそに隔てゝ住む身には
成らぬ望みを夢に見て
心なやます夜半もふし
細谷川をゆく水は
濁らぬ月の影のせて
靜けき歩み運ぶらん

其二十

されど枯骨を埋めたる
土のうへには一片の
しるしの石をのこしたり
面にきざむ其文字の
あとは拙ふく見やれども
幾旅人のはらわたを
斷たせて露にぬれつらん

其二十一

石の上には著るく

主人の名こそ讀まれたれ
その年月も書かれたり
經の文句も彫られたり
これぞ數多の村人に
死に行く道を諭すふる
文字なき里のよき教へ

其二十二

苦樂ともゝやきかひて
心ふやます此浮世
望と共に投げすてゝ
此身と共に離別して

また躊躇はず泥さはず
忘るゝ人は誰ならん　死に別れゆく其時に

其二十三

此世の名殘いつまでも
冷えし胸にや殘るらん
別れの涙いつまでも
閉ぢたる目にや溢るらん
愛の餘はいつまでも
灰の内にや燃えぬらん
むせぶは人か夜嵐か

其二十四

暮れの花も咲かずして
此世を去りし人々は
たゞいたづらに歌にのみ
短き傳記をのこすふり
今も族の人たちが
沈む思ひに堪へかねて
汝が身のむかし問ふふらば

其二十五

雪を頭に戴きし

里の翁は語るらん

『草葉の露を踏みわけて
日の出を見んと朝早く
登りふれたる岡の道
あれ又今朝もかしこにと
言ひし朝もいくたびぞ

其二十六

『うねりは高く又低く
根はる川邊の柳かげ
腰うちかけて昨日まで
日ふたぼこりの樂しげに

伸ばす身体も見られたり
下ゆく水に見とれつゝ
立てる姿は其まゝに

其二十七

『森の木陰のおちこちを
ほゝゑみ歩く其人の
物思はしげの顔色は
心に何をか憂ふらん
見捨てられたる戀人の
絶えし望や夢むらん
頭うち垂れてしほ〳〵と

其二十八

『あれあの人がと朝ごとに
指さしなれし片岡の
木陰に今朝は影もふし
やがて其夜も又明けて
野にも山にも跡たえぬ
日の出をがみし岡邊にも
からだ伸ばしゝ川邊にも

其二十九

『また其次の朝も來ぬ

哀しき歌におくられて
柩は寺に向ひたり
彼は墓路に向ひたり
見よや木陰の石ぶみに
とゞめて朽ちぬ歌の文字
讀みて知るべき君なれば

其三十……碑銘(上)

春の光に逢はざりし
身は此土の下にあり
花の響れを受けざりし
身は此苔の底にあり

木深き谷に潛みつゝ
　涙の内に生涯を
　　送りし人は唯こゝに

其三十一……碑銘(中)

慈悲のこゝろの深ければ
　天の報いはあやまたず
その身の上を照らしたり
　世の貧人に流したる
涙は天に登りつゝ
　一人の友を降しけり
　　願ひしまゝの其友を

其三十一……碑銘(下)

今は功も語るなよ
　また過も話すなよ
はや魂は天國の
　父の胸にぞ打ち休む
功あやまちすべてたゞ
　望みのうちに輝きて
　　神の側にぞ打ち眠る

歐米名家詩集上卷終

明治廿六年十二月廿五日內務省許可
明治廿七年一月二十七日印刷　發行

國民文庫定價

壹册（二百頁）金拾貳錢	郵稅一册六錢
六册前金六十七錢	
十二册前金壹圓廿五錢	

編輯兼發行者　大橋新太郎　日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　近藤圭造　麹町區飯田町五丁目廿六番地

印刷所　近藤活版所　麹町區飯田町五丁目廿六番地

發兌元　博文館　東京市日本橋區本町三丁目

版權所有

賣捌所

東京	東京堂
同	水野慶次郎
同	東海堂
同	縱々堂
同	信文堂
同	石川商店
同	上田屋本店
大坂	盛文館
同	吉岡平助
同	柳原喜兵衛
同	梅原龜七
同	岡島新開舗
同	平井新聞舗
同	中村峯雄
京都	東枝律書房
同	田中治兵衛
名古屋	川瀬代助
同	新文舍
同	片野東四郎
神戸	熊谷久榮堂
同	舟井新聞舗
同	吉岡支店
同	舩山堂
熊本	長崎次郎
鹿兒島	吉田幸兵衛
長野	西澤喜太郎
松本	水琴堂
同	高美書店
四日市	伊藤善太郎
津	河島九右衛門
岡崎	愛友舍
濱松	谷島屋源三郎
同	林新聞舗
沼津	蘭契社
甲府	柳正堂
横濱	丸屋書店
同	里見亭太郎
鴻ノ巣	長島爲一郎
東金	多田屋本店
千葉	仝支店
佐倉	吉田德兵衛
佐原	朝野利兵衛
水戸	川又銀藏
大津	澤一二郎
同	太田支店
上諏訪	宮坂日新堂
小諸	廣文堂
飯田	晉川文星堂
前橋	煥予堂
宇都宮	内山港三郎
栃木	宮川庸三郎
平	清光堂
白河	奥村書店
福島	上野屋彦太郎
仙臺	木村文助
同	佐勘書店
石ノ巻	山口德之助
盛岡	佐藤庄兵衛
同	便益堂
弘前	野崎九兵衛
青森	鐘田商店
山形	八文字屋書店
同	牧野德太郎
米澤	素月長平
秋田	成見清兵衛
同	鈴木秋穗堂
横手	大澤忠四郎
増田	東海林書店
酒田	鈴木喜八
福井	品川太右衛門
武生	安立庄三郎
金澤	雲根堂
小松	宇都宮源平
富山	清明堂
高岡	學海堂
新瀉	櫻井產作
長岡	覺張治平
同	目黑十郎
高田	室直三郎
同	高橋書店
水原	西村六平
松江	川岡清助
岡山	武內彌三郎
姫路	朝榮社
廣島	松村善助
山口	宮川臣吉
和歌山	平井文助
德島	坂井萬吉
博多	積善舘支店
同	森岡商店
久留米	菊竹儀平
大分	山川正三郎
長崎	虎與號商店
同	鶴野書店
佐賀	河內汲古堂
函館	魁文社
札幌	聚文堂
同	前野長發
同	小鹽自治堂
同	萱間左右太

全部出版完成

大和田建樹先生著

通俗文學全書

定價 一冊金拾五錢〇六冊前金八十五錢〇全部十二冊前金一圓六十錢〇郵稅一冊六錢ツヽ

全部拾貳巻毎編續切
洋裝美本
紙數一冊百六十頁

國語といひ國文といひ和文學の流行も頗る極度に達したりと謂ふへし然れともこれを學ぶもの動もすれば古文學の一方に偏して現時社會の關係を忘れたるが如き觀なき能はず此に於て通俗文學全書の生れたる豈偶然ならんや其目的は貴族的にあらずして平民的文學の奬勵にあり其趣向は定義ずくめのむつかしきものにあらずして一般の文學智識と興味と共に得せしむるにあり故に巻の順序を立つるにも學問上の正法に依らずして讀者を倦ましめざる一の變法を用ゐる以て結局に至り初めて大團圓の文學者たらしめん事を期したるのみ其毎巻の目録は左の如し

第壹編　修辭學　全壹冊

文章の美觀收めて本書にあり筆を把るものは東都の文豪紙に落ちたるは美文の深粹美觀何等の美麗霜雷驅り雲霞に月露を描き筆と剪彩紅花に色どる思を風細は花鳥一枝の筆大は策猷經綸と談ず惟夫れ此千古を風動し萬世を傾倒す、詮し來れば文章修辭の功豈又大ならずや巧みに言語を變化活用して備さに妙境に達し以て人心意に至大の感を發生せしむるもの是修辭學にあらずや文章の趣味情感并に聽納者を感動せしむるもの是修辭學にあらずや本書よ之を發明するもの極めて新新明晰開題に研し究りて文章裝飾の必要を說き定義を叙し文の原素を論し凡文の法を示し一轉して文の深宮に入り和歌一和文の裝飾と述へ更に進むて其應用して若し泉の如く度文の西洋の作法を趣味的に論じたるもの思ふに本書にあるは本書の作を繙かは才情油の如く文學の福音は平氏的

第貳編　新體詩學　全壹冊

歐米文學の空氣一たび壓入せしより新體詩の流行日に月に隆盛と極め雜誌に新聞に其作を見る事ほとんど虛日なきが如し然れども未だ嘗て之が作法を敎へ之が方針を示したる書の出でざるハ遺憾なり此に至てか先生の此著あり書中に說く處開題に起りて次に新體詩の沿革より、句格、段格、用語、意匠、裝詞、文法、連例等の數章を經て、書式、讀法、作例、新案に終る其文解し易く其趣向實に面白し苟くも文學に志ある諸君子の興味と實益とを併せ得らるゝハ蓋し此書に在らん

第參編　應用和文學　全壹冊

「こそ」「けれ」「なん」「待る」の源氏文。美はなりと雖も普通文はこにのみ偏すべけんや。「夫れ」「此を以て」「所以なり」の外史文。妙は妙なりと雖も普通文はこにのみ傾くべけんや。此一系一剛の兩極文體を折衷し。謂ゆる通俗文標準を定めん事先生が年來熱心に研究せられし所なり。今應用和文學の出でたるは。蓋し此持論と研究の結果

とを世に公にせられしのみ。請ふ看よ先生が平易の文體は其理想の在る處を明にせし者なる事を

第四編　狂言評註　全壹冊

能の狂言は足利時代の言語を留めたる蓄音器なり足利時代の風俗を遺したる寫眞なり之を一讀せば當時に言文一致の文章ありしを知るべく之を二讀せば當時に通俗文學の好例ありしと見るべし中にも諧謔を以て世と諷し冷罵以て人を笑いすの妙に至りては他に何物か肩を比ぶるを得べき先生此に見るあり其妙文と特撰して評註を加へらる其評は輕快其註は簡明閑窓永日の友蓋し之に過ぐるもの無からん

第五編　應用歌學　全壹冊

世に和歌の作法を敎ふる書多しと雖も、其簡便にして興味と備へたるは、大和田先生の應用歌學なりとす　如何に初心なる少年子女と雖も、讀んで解し易く試みて實益あるい、大和田先生の應用歌學なりとす、卷中載する處數十條、作歌訣あり、思想言語の撰擇法あり、題詠心得あり、文法入門あり。而して最後に實修の法を擧げ、先生が門生の詠歌に、添削批評を加へたる實例を示し。更に古人大家の作品に就きて、其妙處と指摘せられたり。苟くも歌學に志す人々ハ、讀んで歌の歌たる所以を辨明し給へ

第六編　紀行文選　全壹冊

今や汽車汽船の便四方に起りて、短きは一二泊、長きも一二週間にして、名所古跡に逍遙し、温泉海水浴に暑を避くる事、自在の世の中と爲りぬ、されば旅行者の年々に增加するも、亦自然の勢なるべし、此に於て先生の此著出づ、蓋し其カバン中の一要品たらしめんの意のみ、本書は其模範となるべき古今の記行文を撰集し、之に評註を加へたるものなり、

第七編　歌曲評註　全壹冊

神樂催馬樂今樣謠曲長唄端唄子守唄手鞠唄に至るまで我日本の歌曲ならずと云ふ事なし然るに世人動もすれば古曲を尊び

て新曲を産むい何ぞや他なし時勢人情と共に沿革あるを知らざるが爲めのみ先生此に慨する有つて此書を著はす蓋し其精神は古を引きて今を興さんとするに在るなり見るべし評註の以て爲めにする處あると

●第八編　應用漢文學　全壹冊

漢文學といい何ぞ漢文を讀む事と漢文を作る事との研究法を謂ふなり應用といい何ぞ啻に理論を究むるのみに止まらずして之を獨學實修せしめ且我和文學の一助として應援せしむるの方法を謂ふなりされば此書い漢文學にして和文學を兼ね說く處の事高尚に似たれども實い通俗文學的の精神と以て漢文學の大意を述べたるものなり請ふ世の漢文者流の漢文學と同一視せられざらんことを

●第九編　淨瑠璃評註　全壹冊

諸葛孔明の出師表を讀んで、泣かざるものも、伽羅千代歌を讀めば、必ず泣き。李密の陳情表に對して、涙を濺がざるものも、奥州安達原に對していい、必ず涙連々たるい、何ぞや。他なし淨瑠璃文章の通俗にして、多數の讀者を感せしめ易きが爲めのみ、或い怒り、或い笑ひ、或い泣き、或は歡び、趣向に變化多くして、文章自在を極むるが爲めのみ、先生の通俗文學に熱心なるい、本書の卷を改むる事、既に九回なるを以て、知るべし。今亦此評註を著して、其解し易く、味ひ易きものより、入らしめんとす、其註や、丁寧。其詳や、爽快。誰かこれを一讀して、近松文學の眞趣を、掬し得ざるものあらん。

●第拾編　作文組立法　全壹冊

曰く言語と文章、曰く文章と思想、曰く作文の要領、曰く作文の批評、曰く作文の實修、曰く文題の標準、曰く文章の種類、順序と逐うて初學の者も入り易く、方法を明にして獨學の人も窮め易し、是れ此書の特性なり、古文を學ぶと二の次として、今文に從事せよと勸むるい、此書の精神。摸擬に流るゝ、弊を嫌ひて、我思想を寫せと教ふるい、此書の骨髓。以て一讀再讀の價値ある事を知るに足らん、

●第拾壹編　書簡組立法　全壹冊

曰く書簡文書き習ふべし、曰く書簡文たやすく書くべし、曰く書簡文い他の文体と異なり、曰く漢文的に偏すべからず、曰く和文的に偏すべからず、曰く男女性を異にすべし、曰く四つの性質を備ふべし、是此書の書簡文の書方を教ふる目錄の大要なり、其他に稱呼の事あり、八つ書きの事あり、封紙の書式あり、書簡文の種類あり、以て日用便利の書たるを知るべく、以て男女座右の寶たるを知るべし、終に文例を擧げて其模範を示し、參考文を揚げて德川時代の作を載せたり、此に至つて書簡文を學ばんとする人々に取りていい、其便其利一として漏るゝ處なし、請ふ愛讀の榮を賜へ、

●第拾貳編　日本文人傳　全壹冊

名文名歌ありと雖も其作者を知らざる時い索然として味無きに近からん、其作者と知ると雖も其傳と時代とと詳にせざる時い豈玻璨を隔てゝ美藥に對するの感なからんや。通俗文學全書の第十貳編に於て此目的と達せしむるものい。蓋し本書中に屢ば引用せし歌文作者の姓名をして。未だ腦中を去らざる前に其記臆と趣味とを益す強固ならしめつゝ。施いて古今文界の大家を紹介せんとするに在るのみ。此に至りて此書一先づ完結す。全篇十貳冊相連絡して離れざるの書たるは讀者既に豫知せし處ならん。今や此卷を得て亦遺憾なかるべし。

大和田建樹先生標註校訂

謠曲通解

全部八卷
毎卷讀切
和裝美本

正價 一冊（二百頁）廿五錢○四冊前金九十五錢○全八冊前金一圓八十錢○郵税一冊六錢づゝ

其文は自然其意は幽玄にして神韻の掬すべきは謠曲に在りとは大和田先生の持論なり世人は謠曲の吟誦すべき者たるを知て未だ文學上必讀の價値あるを知らず謠本の扇子に伴ふ者たるを知て文學史中一大特書せらるべき者たるを知らざるなり先生の此著あるを蓋し之を慨するに出づるのみ此書は現存の謠曲を悉皆網羅して註解を附し妙處を示すと丁寧反覆而して專ら通俗を主とす一讀以て神道佛法を學ぶ可く以て歷史古實を諳ず可く以て詩歌文章を知る可く以て名所名蹟を探る可し苟くも文學と謠曲とに志す諸君は之を座右にして字書に易ふるの價なからん乎

●第壹編目次

●首巻●總論○歌舞の起原○猿樂の起原○能の大成○能の作者○明和の改正○能の組織○能の興味○謠の文學上價値○通解の由來○高砂○田村○東北○道城寺○鶴龜○實盛○熊野○羽衣○竹生島○班女○小袖曽我○右近○邯鄲○千手○遊行柳○室君○張良○朝長○野宮○仲光○土蜘蛛○小鹽○小督○大原御幸○百萬○船辨慶○岩船○卒都婆小町

●第二編目次

老松○八島○江口○望月○紅葉狩○葛城○知章○玉葛○鞍馬天狗○海士○大蛇○三山○熊坂○安達原○咸陽宮○忠度○隅田川○夜討曽我○鉢木○藤榮○吳服○花月○花筐○弱法師○七騎落○金札

●第三編目次

白樂天○籠○揚貴妃○俊寛○壇風○難波○放下僧○松風○安宅○攝待○雷○經政○求塚○天鼓○羅生門○氷室○正尊○富士太鼓○鐵輪○唐船○西王母○巴○杜若○藤戸○山姥○嵐山

●第四編目次

養老○敦盛○井筒○關寺小町○石橋○加茂○水習○蟬丸○蘆刈○殺生石○善界○松虫○三井寺○水賊○融○鵜飼○頼政○夕顔○馬追船○雷電○志賀○清經○砧○阿漕○大江山○春日龍神○西行櫻○大瓶猩々

●第五篇目次

三輪○鵺○芭蕉○白髭○烏帽子折○三笑

○竹雪○姨捨○絃上○弓八幡○項羽○源氏供養○錦木○大會○皇帝○春榮○籠太鼓○一角仙人○自然居士○放生川○生田敦盛○胡蝶○柏崎○通小町○當麻○合浦○調伏曾我○元服曾我○草紙洗小町

第六篇目欲

龍田○兼平○誓願寺○葵上○彈師曾我○佐保山○通盛○祇王○高野物狂○須磨源氏○卷絹○關原與市○藤○鸚鵡小町○松山鏡○枕慈童○忠信○吉野靜○二人靜○歌占○第六天○船橋○身延○現在七面○鷺○東方朔○俊成忠友○梅枝○加茂物狂○車僧○御裳濯○碇潛○浮船○千引○小鍛冶

第七篇目次

玉井○橋辨慶○檜垣○東岸居士○國栖○江島○鱗形○佛原○籠祇王○葛城天狗○和布刈○土車○櫻川○飛鳥川○舍利○道明寺○湛海○住吉詣○谷行○龍虎○寐覺○空蟬○六浦○水無月祓○昭君○大社○淡路○雲雀山○戀重荷○花軍○水無瀨○吉野天人○錦戸○通守

第八篇目次

蟻通○大佛供養○女郎花○定家○鐘馗○繪馬○泰山府君○半部○墨染櫻○飛雲○伏見○雪○善知恩○愛宕空也○久世戸○松尾○落葉○藍染川○松山天狗○祭○源太夫○雲林院○綾鼓○輪藏○代主○盛久○梅○草薙○逆鉾○切兼曾我○采女○舞車○常陸帶○浦島○猩々

大和田建樹先生著

和文學史

全壹冊背皮
金字入上裝
正價九拾錢
郵稅拾貳錢

此書は論文と作例とを交へ擧げて面白く日本文學の沿革を叙述せしものなれば論文だけを文明史の一部分として見るをも得べし作例だけを讀本として用ふるをも得へしこれを教科用書とせば其程度高さに過ぎず低きに偏せず其分量簡易に流れず冗長に失せずして最良教科書たるを得べくこれを獨學用書とせば文學の趣味自然に誘起せられて知らず識らずの間に古文今文の別をも學び得らるゝの最高教師たるを得べし其他滿卷の新特色あることは購讀者諸君の味ひ得て而して後に知る所ならん

大和田建樹先生註釋

文部省御選定

祝祭日唱歌註釋

全壹冊雅裝
正價金六錢
郵税金二錢

口には「君が代は」と歌へど、其の意味の何たるとば、十分に解し得ざる人あり、何となればその詞が古言なればはなり、註釋の必要此に於てか起る、其意味を知りて歌ふと、知らずして歌ふと、其興味果して如何ぞや、此に於てか註釋を讀む事の必要ます〳〵迫る。此書は必要に因て成り、其必要の衢路に立たる、教員生徒諸君の購讀を、待ちつゝ有るものなり

大和田建樹先生著

尋常小學 帝國唱歌　全二冊　正價十四錢　郵税四錢

高等小學 帝國唱歌　全二冊　正價廿四錢　郵税六錢